

安政6年(1859)の横浜開港が決まると、山手からのびる砂浜の上の横浜村に設定された外人居留地の関内<sup>かんない</sup>を分離するために、岬根元を横断して、中村川から海までの間に幅10間の堀川が開削された。そこに谷戸橋、前田橋、西之橋の3つの木桁橋がかけられた。

明治20年(1887)に、木造橋床つきのポニー平行弦プラットラス橋に架けかえられた谷戸橋は、関東大地震のとき片側の橋台が崩壊し、トラスは川底に落下した。谷戸橋のように下部工が、あるいは上部工が破壊した橋の他に、地震による火災で、当時まだ大勢を占めていた木橋や木造橋床が炎上して、惨害をより大きくした。この経験から、震災後の復興にさいしては、たとえば横浜だけでも178橋がかけられたが、そのほとんどが鉄筋コンクリート床版をもつ永久橋梁で架設された。このように震災復興は、日本の橋梁技術や橋梁構造を飛躍的に発展させた。

谷戸橋は昭和2年(1927)7月、鉄筋コンクリート床版をもつ上路スパンドレルブレースドアーチ橋で復興した。親柱は、花崗岩でデザインされ、塔頂に装飾灯をかかっていた。

橋の高欄や親柱など、橋梁一般とくに大都市の橋の高欄廻りの意匠に力がそそがれるようになったのは、明治末から震災前にかけてである。日本橋や四谷見附橋、呉服橋などの装飾ゆたかな橋が架設された。震災復興橋梁では、それまでの装飾重視をあらため、構造美に重点をおくようになったが、それでも直線や曲線、幾何学模様をとり入れたアール・デコ様式が、高欄廻りのデザインに採用された。

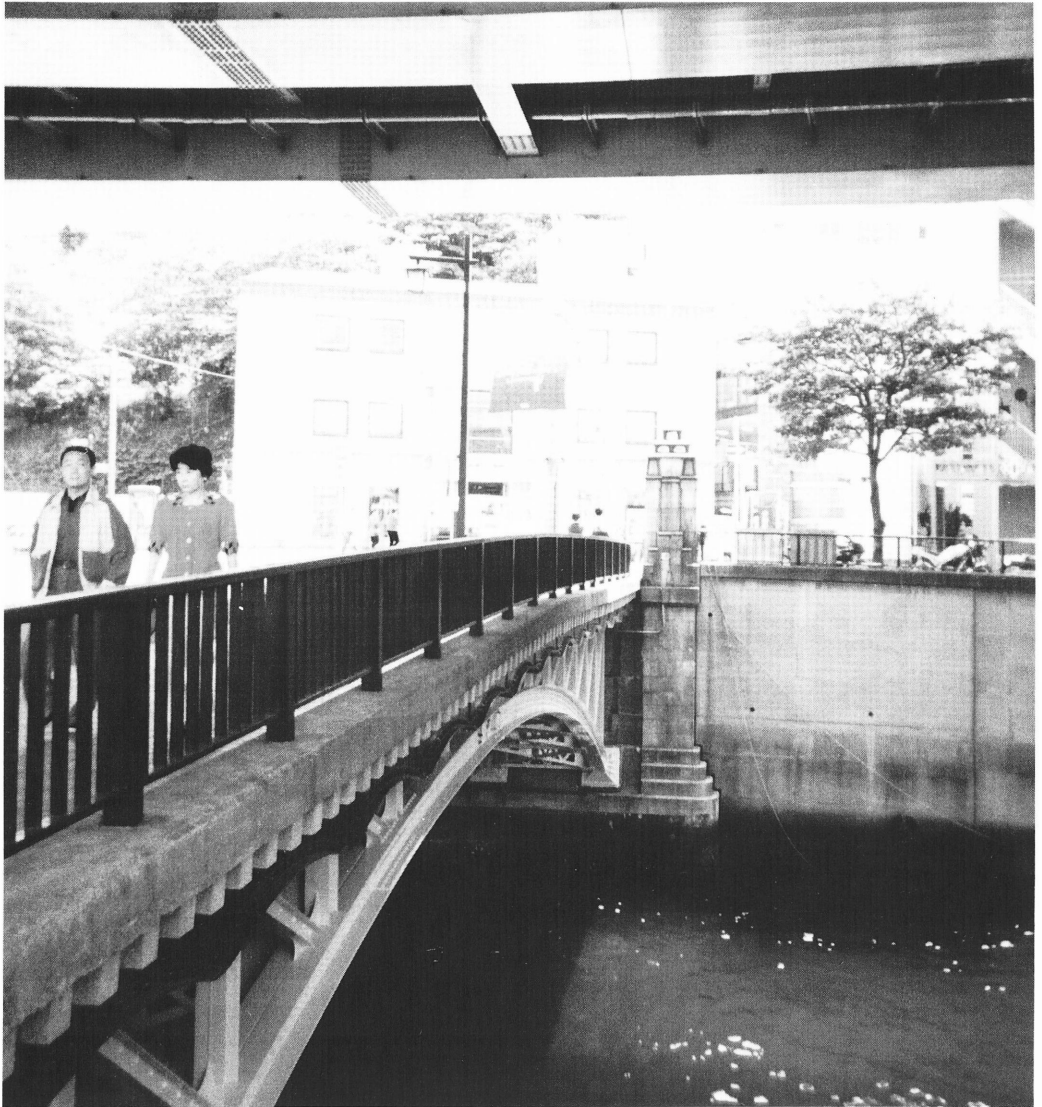
高欄の端に位置する親柱は、橋の入口である。計4か所の親柱には、それぞれ漢字とひらがなの橋名や竣工年月、それに河川名が記されていることもある。親柱はそれぞれの橋の門あるいは顔として、意匠に意が払われた。

なお、各々の橋の要目を示す橋歴板を取り付ける習慣は明治の昔からであったが、現在ではより体系化して、その橋の活荷重、使われた材料の材質、発注者、製作者、製作年月を記した橋歴板を、橋桁に直接とり付けておくことが、共通示方書ではっきりと決められている。

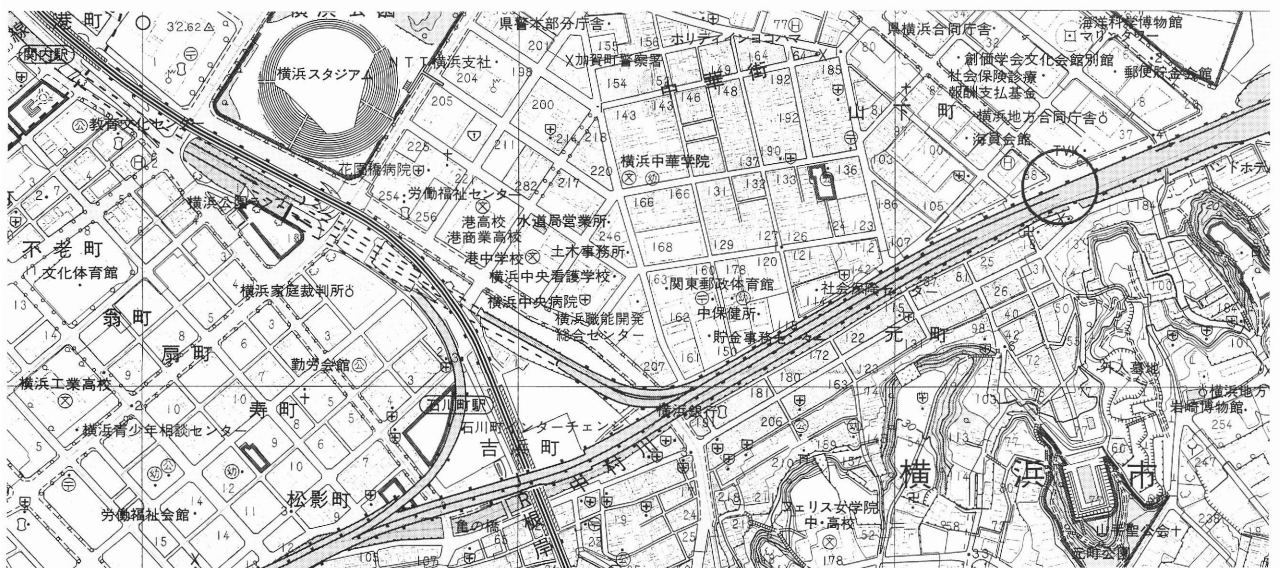
谷戸橋は、架設以来70年、その間に戦災も受けた。親柱は、先年大規模な修復と清掃がなされ、竣工当時のままの姿で人びとに見守られるようになった。港街の横浜地区や山下公園あたりからフランス山や元町方面に往還する人びとは、谷戸橋の親柱に迎え、送られている。

〔F I〕

竣工年月：昭和2年7月9日  
 所在地：横浜市中区  
 河川名：堀川  
 橋長・幅員：29m×15.0m（車道9m+歩道2×3m）  
 径間数・支間長：1×27.4m  
 形式：上路3ヒンジスパンドレルブレースドアーチ



〈1994年5月，撮影・藤井郁夫〉



(1:10,000 関内)